第１回「岐阜県子どもの読書活動推進計画（第五次）検討委員会」議事要旨

■日　　時：令和６年９月４日（水）　９：５５～１１：５０
■場　　所：岐阜県図書館　２階　研修室２
■出 席 者：＜委員＞
岡崎信美、杉山喜美恵、長谷川千穂、蒲尚胤、宗宮昭雅
＜オブザーバー＞
馬場課長補佐（義務教育課）、栗本指導主事（高校教育課）、
高橋課長補佐（特別支援教育課）、勅使川原課長補佐兼係長（子育て支援課）、
永田課長補佐（県民生活課）、石井課長（図書館）
＜事務局（文化伝承課）＞
高井課長、蒲課長補佐兼係長、鈴木主査
■説明・検討事項：
（１）「岐阜県子どもの読書活動推進計画（第五次）」策定の背景と「岐阜県子どもの読書活動推進計画（第四次）」の取組みと成果・課題
（２）「岐阜県子どもの読書活動推進計画（第五次）」について

■議事要旨：
（１）「岐阜県子どもの読書活動推進計画（第五次）」策定の背景と「岐阜県子どもの読書活動推進計画（第四次）」の取組みと成果・課題（事務局より説明）

（岡崎委員）
不読率という言葉が説明の中でもたびたび出てきたが、本を読まないのは今に始まったことではない。今の子たちはタブレット、スマートフォンの小さな画面を幼い頃から見ており、本ではなく機器に目を奪われているのは悲しい現状。子どもと本をつなぐ仕事にずっと携わっており、何ができるのかということで、読書活動推進ということをずっとやっている。第１次計画策定から関わっており、子どもの読書活動推進の必要性を切実に感じている。
内容については少しずつ工夫がされ、検討されているが、基本は特に幼い子について考えていきたい。スマホの普及により状況はさらに悪くなっているが、新しい取組みが必要。

（杉山委員）
「読書」の中にマンガや雑誌はふくまれるのか。電子書籍も含まれているか。

（事務局）
不読率の調査である「学校読書調査」では「教科書、マンガ、雑誌、付録は除く」とされており、県内高校生へのアンケートも同様の条件でおこなった。電子書籍は含まれている。

（杉山委員）
マンガや雑誌を読む子の方が本も読むという調査結果が出ている。マンガや雑誌をどのように

とらえていくか、そもそもの「本」をどのように規定するかはポイントになると思う。
　第四次計画中の５年間でオンラインゲームやスマートフォン、タブレットの所持率を考えたときに、所持率が上がっている中でこの数値を保っているといえるのではないか。不読率の数値と社会現状を加味した際の分析が必要。数値は事実としてあるが、その数値を県がどのように分析して何を課題としているのかがうかがえるとより計画の方向性が分かる。

（長谷川委員）
　セット文庫の整備について学校の希望はあるのか。こういうものがあれば利用されるという県の考えで作られているのか。

（石井オブザーバー）
　県図書館のセット文庫については、利用のあった学校へアンケートを行って「充実してほしい分野」など希望を伺っており、希望されたものを限られた予算の中で購入している。セット文庫を知らない学校への PR が課題。教員が集まる場でも PR を行い、その場で出た意見も反映させたい。

（岡崎委員）
　県図書館勤務の頃にセット文庫を作った。県内の市町村・学校図書館への巡回を行った際、蔵書冊数が全国的にみてもトップレベルだったが、古いものが多く、使える本が少なかった。学校図書館への支援としてセット文庫を作ったが、当時は身近な学校の先生の意見をもとに内容を考えた。

（長谷川委員）
　可児市でもセット文庫を作成し、市内学校に貸出を行っているが、学校での調べ学習についてもデジタルの時代となっており、生徒一人一人が端末を持っている時代である。本で調べるのが難しい状況にあると聞いており、調べ学習も電子書籍化していく必要があるのかと感じている。県図書館では高校生への貸出を行っているが、学校に対して電子書籍を貸出する方向性など考えていることはあるか。

（石井オブザーバー）
　県内の私立・公立高等学校、特別支援学校には電子書籍利用登録のサポートをしており、どんどん活用していただくことにしている。県図書館の電子書籍のコンテンツは主に課題解決の内容が主であり、内容が高度である。小・中・幼児向けの電子書籍の分野を広げていくという予定は今のところない。

（蒲委員）
　計画は、あらゆる機会を設けて読書に親しむ時間を作ろうということがよく考えられている。羽島北高ではスマートフォンは朝預かり、放課後返却しているが、返した瞬間から触り続けている。生徒を読書の方向へ向けさせるには、まとまった時間を与えてあげないと向き合えない。ま

た、読書の機会や時間を与えると同時に興味を与える必要がある。興味をもたせる指導をするには、大人が本を読んでいる必要がある。教員が本を読むきっかけにもなるよう、「校長文庫」を設置している。大人が本を読まないと子どもにも本を勧められない。

探究活動については、かつては図書館に行っていたが今は基本的には教室でスマートフォンやタブレットで検索している。スマートフォンと書籍が共存していくことは、高等学校の現場でも強く進めていかなければならない。

（宗宮委員）

第四次計画は丁寧な作りとなっている。コロナの影響により２，３年推進できなかった実情を考えると、引き続き取り組んでいくべきかと感じている。一斉読書の数値が落ち込んだのは明らかにコロナがきっかけで、臨時休校や日課をコンパクトにした中で活動が戻ってこなかったと考える。活動は取りやめたままなのか、復活したのかの精査は今後していく必要がある。

第四次計画を啓発し、大人や指導者が計画の概要を知っていることが大事だと考える。県図書館はいろいろな取組を進めているが、市町村や学校図書館の中で使えるノウハウや、共有できるものがあれば発信してほしい。

また、「読書センター」としての役割だけでなく、配架の内容やジャンルの比重等、戦略的に配架の内容を入れ替えていくことについて、県としての方向付けがあると学校はひとつの方向に向かって目指していくことができる。

現計画を継続し、さらにブラッシュアップ、プラスアルファのものを加えるのがいいのではと思う。不読率について小学校は特に責任を感じている。教員も若くなると、読書機会が少ない世代となっている。大人の読書も含めて、県民が本に触れるという発信ができるといいと思う。

（馬場オブザーバー）

調査が行われた令和２年度はコロナ禍にあり、活動の制限があった。コロナ後の現状として、ICT 機器は国も推進しており、生活に根付いている。ICT をどのように読書とつないでいけるかは考えていかなければならない。

調査について「全国学力・学習状況調査」で「読書をしていますか」という項目はなくなっている。「学校図書館の現状に関する調査」は５年おきとなり、計画の根拠となるデータも古くなってしまう。

（栗本オブザーバー）

高校は学校司書が色々と工夫している。生徒の趣味、習い事等は多様化している時代であり、生徒にとって「タイパ（タイムパフォーマンス）」が重要視される中で、新書など短い時間で読めるようなものに新しい需要があると思っている。

県立学校の生徒には一人一台タブレット端末が貸与されており、これからはタブレットで読めるような本、電子書籍が高校生の読書推進の上でポイントになると思っている。

（高橋オブザーバー）

特別支援学校では、新しい本を購入する環境整備が整っていない。そのため、県や市でのセッ

ト文庫の貸出は、児童生徒が新しい本を手に取ることができ、読書活動の意欲につながっている。
　県立学校司書のエリアマネージャーによる学校支援訪問により、図書館の整備が進められている。今後もエリアマネージャーの支援を受けながら整備を進めていくことが大きな課題。
　特別支援学校の児童生徒は読み聞かせが好きであるが、コロナ禍で中止となり読書活動への意欲につながらなくなった。今後、PTA やボランティアによる読み聞かせ活動を再開していきたい。
　多くの児童生徒は、ICT を活用した読書活動に興味があるため、継続して環境整備に取り組んでいきたい。

（勅使川原オブザーバー）
　放課後児童クラブ、児童館の支援を課でおこなっている。遊びの場の提供が趣旨であり子どもたちは気ままに過ごしている。読書の機会を作るため本は必ず置いてあるが、本が少なくて古い。学校の敷地内に放課後児童クラブがあるところもあり、図書館で借りてきた本を読む子どももいるが、読書に触れる機会が十分ではない現状。
　放課後児童クラブには放課後児童支援員を設置する必要があるが、研修で過ごし方の一つとして読書の重要性を継続して伝えているところ。夏休みはゲーム機持ち込み可となっている施設もあり、バランスよく読書にふれていけるといいと思っている。

（岡崎委員）
　放課後児童クラブは各学校現場に設置されているのか。

（勅使川原オブザーバー）
　県内では５８０ほどで、ほとんどの学校に設置されている。

（永田オブザーバー）
　県民生活課では地域学校協働活動の推進に取り組んでいる。事例として、小学校での読み聞かせや、学校支援・スクールサポーターということで読書環境の整備や読書のきっかけ作りとして地域の方が学校に入って活動をしているという事例を多く聞いている。読書のための時間や機会を与える、きっかけを作るというところで、学校だけでなく家庭・地域も一緒になって取り組むことが必要だと感じた。
　学校図書館、公共図書館が子どもの居場所であるということも考えていく必要がある。

（２）「岐阜県子どもの読書活動推進計画（第五次）」について（事務局より説明）

（杉山委員）
　ブックスタートに準じたものなど取りまとめが今回示されていないが、状況等はどうなのか。おはなし会の状況（開催回数、幼児、児童の参加者）、学校司書の設置状況など前回は報告があったように思う。計画を継続していくという方向性の根拠となるものが補足としてあるか。

（事務局）
　市町村の取組状況は文化伝承課で隔年で行っており、資料４で示してある。

（杉山委員）
　今回第四次計画のまとめにおいて、数値は分かるが分析がなく中身が見えてこない。ボランティア人材の育成についても、登録者が減っているという数値は分かるが、減った人数でも充足しているのか、など教えていただけることがあれば。

（事務局）
　今回は数値で成果を示す資料となっているが、増減の分析については各市町村に問合せをしていないため、理由や問題点は今後調べていく必要があると考える。

（杉山委員）
　今日は成果の報告であり、今後考えていくところではあるが、共有されるとより計画策定に活きてくると思う。

（岡崎委員）
　「子どもの読書活動を支える人材の育成」とあるが、県図書館にはボランティア養成についての声は上がったり、ボランティアに関する調査等はおこなっているか。

（石井オブザーバー）
　市町のボランティア養成のために読み聞かせやおはなし会に関する研修を希望する声は聞こえてくる。学びたいというニーズはあると考えており、県として支援したいと考えている。

（岡崎委員）
　今回は目標値は設定しないとのことだがなぜか。

（事務局）
　第３次、第４次で設定された目標値が特に力をいれる取組みという訳ではなく、全体的に活動を進める中で最終的には不読率の低減や基本方針につなげたいと考える。

（長谷川委員）

可児市のボランティアは高齢化に伴い減少している。常に新しいボランティアを養成することが市の課題にもなっている。ボランティアの定義や人員数・グループ数の目安を示すガイドラインのようなものがあるといい。

（岡崎委員）
「児童館や放課後児童クラブと公立図書館との連携」が増加したのはなぜか。

（勅使川原オブザーバー）
文化伝承課の調査であるが、確認させていただく。

（杉山委員）
今回「多様な子どもたち」への支援が色濃く出ると思うが、特別支援学校において不足していると思う部分、支援がほしい部分があれば教えてほしい。

（高橋オブザーバー）
ICT 機器の活用が進んでいくとよい。電子書籍が好きな児童生徒は多い。動きがあったり、読み上げ機能があったりと、さまざまな障がいの児童生徒でも親しみやすく、自分で読みやすい。デジタル絵本などの電子書籍の種類を増やし、主体的な読書活動につなげていけるとよい。

（宗宮委員）
基本方針、方向性は踏襲されるのが妥当だと考える。県の理念、方針がどうやって伝わっていくのかが肝要。県内各地でそれぞれの家庭や学校、図書館などで活動の広がりをみせると効果を発揮すると考える。市町村には活動が減少した理由を聞くとよい。

（岡崎委員）
ICT 機器について、高校でも使われていると思うが電子書籍を読むという形で使われているか。

（蒲委員）
電子書籍として使っている生徒は少ないのではないかと思う。朝読書は書籍が基本。

（栗本オブザーバー）
タブレット端末はセキュリティ上の制限があり、自由にサイトにアクセスしたりコンテンツをダウンロードできるわけではなく、そこのハードルがある。タブレット端末を読書活動に活用している事例は聞いたことがない。

（事務局）
今日のご意見をふまえ、次回、第五次計画案を提示する。